浦島太郎

Eiko Yonezu Larsen
Junior Campus
St. Michaels University School
British Columbia, Canada

学習者年齢：　9〜11才
日本語レベル：　初級
文化面の目的：　「浦島太郎」の劇を演じる
　　日本人の自然観について理解する
学習する日本語：あいさつなど簡単な日本語

学習目標

昔話は、素朴なストーリーの中に日本人の国民性、生活観、人生観を雄弁に表現している。動物を含む、自然とのかかわりが美しく織り込まれた「浦島太郎」の話を劇化することにより、日本人の自然観および生活の中の自然とのかかわりについて理解する。

授業の進め方

＜台本のあらすじ＞[場面]

1. [序幕]　黒子が登場し、「浦島太郎」の始まりを告げる(黒子の役目について説明する)。
2. [教室]　日本語クラスでは、なぜつるとかめが日本でおめでたい生き物とされているか学んでいる。
3. [浜辺]　子どもたちがかめをいじめているところに浦島太郎が登場し、かめを助ける。助けられたかめは、お礼に浦島太郎を竜宮城へ連れていく。
4. [海の底の竜宮城]　乙姫が浦島太郎を出迎える。歓迎の宴の間、歌に合わせて四季の庭が次々と紹介される。浦島太郎は、竜宮城で過ごした年月の詰まった玉手箱をお土産に受け取って帰る。
5. [浜辺]　帰ってみると、人々はだれも浦島太郎のことを知らない。困った浦島太郎が、開けてはいけないと言われていた玉手箱を開けると、たちまち白髪の老人になってしまう（この時に黒子が浦島太郎に白いひげを付ける）。かわいそうに思った乙姫は、浦島太郎をつるに変え、かめとともに末永く暮らせるようにしてあげる。
6. [教室]　クラスが終わる。

＜演劇の利点＞

・いつもの授業から抜け出し、自ら舞台で演じることを通じて日本語や日本の文化をからだ全体で感じとることができる。カナダっ子は自己主張が強く、舞台で演じることが大好きである。
・自分たちの文化との比較がしやすく、ふだん忘れていたものや、忘れがちなものを見直すよい機会になる。
・ポスター作りや、劇に関係のあるビデオ観賞など、当日に向けて全員で目的意識を持った授業ができる。

＜台本作りに当たっての工夫＞

・2組、40名の生徒全員に対して公平に出番やせりふが回るようにする。
・ドラマの筋に影響のないせりふだけを日本語にし、あとの部分は観客が理解しやすいように英語にする。
・劇の始めと終わりに日頃の教室風景を配し、劇の内容を補足する。
・黒子を通じて古典芸能に興味を持たせ、劇中の仕掛けができない部分を補う。見ていないつもり、あるつもり、本音と建て前など、日本の「つもり文化」の説明として黒子を使ってもよい。

＜その他の工夫＞

・試験の時にいい点を取りたい科目を、七夕の場面に飾る短冊にひらがなで書かせ、日本文化を生徒たちの生活と結びつける。
・つるとかめがおめでたいシンボルとして、どのように日本人の生活の中に溶け込んでいるのかを見せるため、伊万里の食器や金と銀の水引きでできた結納品のつるかめの飾りを展示する。
・全員の着物を用意することはできないので、人数分の襟元と帯のみを用意する。あまりにも忠実に日本式にこだわりすぎると、かえってカナダ人にわかりにくい場合もある。

生徒の意見・反応

・劇のために日本語のせりふを暗記したことが以後の授業で役に立ち、日本語のあいさつや表現に感情がこもるようになった。
・自然界のものが、いろいろな形で日本人の生活に溶け込んでいることがわかった。満月の日の翌日、月の中にうさぎを見たと言った子どももいた。

©1996 THE JAPAN FORUM